

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25360039

研究課題名(和文)アイヌ・アートの現在に見る「伝統」とジェンダー

研究課題名(英文)On gender and "tradition" visible today in contemporary Ainu art

研究代表者

池田 忍 (IKEDA, SHINOBU)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：90272286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アイヌ・アートの制作と展示/販売が、今、どのような場で、誰を担い手として、どのようにおこなわれているのかを、歴史的経緯と併せ実態の調査・分析を進めてきた。アイヌの造形については、「伝統」の素晴らしさが語られ、その継承がうたわれるが、何をもち「伝統」とするのか。その今日的な継承は誰が、どこで担うのか。享受者は何を求めているのかを解明する必要がある。研究を通じて明らかにしたのは、アイヌ・アートの担い手が、創作活動の過程で、自らの制作地を離れ、時には「アイヌ文化」という枠組みを超えて、他の地域やジャンルの作り手や発信の担い手と積極的に交流する状況、その影響の広がりや意義である。

研究成果の概要(英文)：The issues adopted for reconsideration include the practices of transmission and history of interpretation of "tradition" that animates both the creator and the recipient of "Ainu art" looking at handiwork with thread and cloth and tree-carving. When considering these practices, it is clear that the categorization of sewing as "women's work" and tree-carving as "men's work" emerge in contrast with one another, granting us an understanding of Ainu society based on history. Certainly, the transmission of everyday labor divisions being underpinned by gender differences is an irreplaceable cultural memory that has come to provide the basis of Ainu ethnic identity.

It is thought that, in modern society, appreciation of gender-differentiated work stems from the variation in economic power, which subsequently affects decision-making and practices in communities, as well as families. Therefore, I have sought to examine changes in Ainu culture through the prism of gender.

研究分野：ジェンダー史、美術史

キーワード：工芸 手芸 アイヌ文様 アイヌ・アート 先住民族 展示 ジェンダー 伝統の表象

1. 研究開始当初の背景

アイヌ文化振興法の施行、衆参両議院における「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」の採択(2007年)に至る動きの中で、アイヌの人々を主体とする文化の発信力は高まり、その受容や研究は変わりつつある。文化人類学・民族学の分野における研究や展示の実践においては、アイヌの人々による主体的な関与が進んだ。またアイヌの人々が比較的多く暮らす北海道の地域においては、例えば平取町二風谷のようにアイヌ工芸の過去と現在を、自然環境と不可分な変容する「伝統的生活空間」とのかかわりを踏まえ提示するプロジェクトが進行している。他方、美術研究の領域では、アイヌの造形を「民族資料」「手工芸」「美術」とジャンル別、かつ階層化して扱ってきた経緯がある。一部の例外的な作家を除いては、アイヌの造形が美術館に展示される機会は未だ少ない。

しかし実際には、アイヌの造形表現者たちは、制度的が規定するジャンルの枠にとどまらず、多様な創造行為を通じ、民族とジェンダーにかかわる複合的なアイデンティティの探究してきた歴史がある。その解明が必要と認識した。また現在、アイヌの造形の制作や発信に「アイヌ」以外の人々の関与が高まり、地域的な広がり呈する中で、「伝統」の理解には揺らぎや変化が生じている。2020年、北海道・白老に新たな国立博物館が開館することが決定し、準備も進んでいるが、博物館のみならず多様な場・空間で展開する今日の「アイヌ・アート」の現状に即し、「伝統」の理解と表現の揺らぎ、変化の分析が、今後の支援強化に際しても緊要と判断した。

2. 研究の目的

本研究は以下の二つの目的を定めた。

第一に、アイヌ手工芸に関する「伝統」解釈の再検討である。アイヌ文化の展示の場における「伝統」の強調の弊害は先行研究が指摘する通りであるが、その主張は近・現代のアイヌ民族自身による作品にも顕著である。文献資料の調査、および制作者へのインタビュー、作品調査と分析を経て、「伝統」理解の実態と変容を明らかにする。ことに性別分業がおこなわれてきた木彫と刺繍の「伝統」については、ジェンダーの視点に立つ言説分析がきわめて有効と考えた。

第二に、アイヌ民族の造形表現を評価・発信する展示の場、受容の文脈の検証である。アイヌの造形表現は現在、民族資料・民族芸術としてのアイヌ工芸 現代の工芸家たちによる作品 少数ながら現代美術として認知されるアーティストの作品と、概ね三つにカテゴライズされている。だが、その三つのカテゴリー間の線引きは、誰によって、何のためにおこなわれているのか、その検討が不可欠である。カテゴリー間の境界線の変化に注意を払いつつ、作品展示や販売の現場の調査を行う。この調査を通じて、制作者に

限らず、展示や販売、研究にかかわる人々のアイヌ民族の造形表現に対する位置づけ、評価の枠組みを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、具体的なテーマ(課題)に沿って、既存のジャンルを横断した対象を設定し、複合的な研究手法を用いて研究を進めることとした。第一にジェンダーの視座に立つ社会史研究、第二に美術史研究の手法を用いた作品分析、第三にフィールドワークによる現代文化、文化表象と展示の研究である。

アイヌ民族による手工芸についての自伝、新聞や雑誌に掲載された記事、映像については、執筆者・発話者・企画者の立場を明確にした上で、基礎的な文献収集と分析を行うこととした。また制作者、展示・販売に関与するアイヌ民族の人々へのインタビュー、フィールドワークを行い、文献資料同様、それらをデータ化・集積・整理、検討・分析を行う。また造形作品は、美術史の図像分析・図像解釈学の手法を援用して考察する。これらの手法を用いて、制作者が参照する伝世品や口承文芸との関係と、その背景を解明するために、「伝統」に関する知識・情報、価値観の伝播・共有の過程を調査しデータ化するという方法をとった。

4. 研究成果

本研究においては、第一に「「伝統」解釈の再検討」という観点からは、アイヌ・アート、アイヌ工芸、手仕事の歴史と歴史像(言説・認識・メタヒストリー)の解明を目指し、資料収集と分析を進めた。その成果は、研究代表者・池田忍、および分担者山崎明子が論文を執筆・公刊した。第二に「展示の場・受容の文脈の検証」にかかわっては、文献資料・聞き取り調査、展示見学を中心とするフィールドワークを精力的に進めた。また、アイヌの造形活動を理解する上で文脈を共有する現代の日本社会における伝統工芸、各地の手仕事の展示・活性化の取り組み、現代アートによる伝統工芸や各地の手仕事への参照・コラボ展示に注目し、取材を重ねた。その結果、アイヌ・アートの“活況”の傍らで、たとえば後継者不足や担い手のジェンダーの偏り、材料確保や商品の質・流通管理の問題、展示の場の固定化、批評の不足など、乗り越えるべき多くの課題が存在することが明らかになった。しかもこうした問題は、必ずしもアイヌ・アートに固有ではなく、日本各地の伝統工芸、あるいは風土や暮らしに根ざしたクラフト、手芸、あるいは現代美術が共通して抱えるものであり、協働する討議や展示の場の開催が期待される。

また、分担者の山崎明子氏の研究により、現在観ることができるアイヌ文化の展示には大きく以下の四つの層があることが判明した。第一に、アイヌの人々が生活の中で生産・消費してきたモノを蒐集し、その資料的

価値を重視して展示される博物展示。第二に、博物展示品を模倣・再現し、過去の生活イメージを立体的に立ち上げる際、欠損部分を補うために再制作される再現展示。第三に、再現を繰り返す中で固定化されたイメージを基に典型化されたデザインを施し、イメージを量産する商業空間。そして第四に、現代に至るまでに社会的に共有されたイメージから新しいイメージを創造するアイヌ・アートの四つの層である。山崎氏によれば、これらの境界線は厳密なものではなく、展示によっては混在していることもあるが、それはゆるやかな連続性を持ちつつも、差異化されている。また、それぞれの展示空間は形成された時期および表象の差異によって区別することができる。さらに同氏は、この四つの区分によって浮かび上がる課題を指摘する。それは、アイヌの人々の新しい表現が、「アート」として博物館に収蔵されていく点にかかわる。アイヌの人々の生活空間から採集されたモノは、現在の多様な作り手によって新しい表現へと向かっている。しかし、それらがアイヌの人々の生活空間に戻らずに博物館に収蔵される傾向にある点が問題であると、山崎氏は指摘する。博物館には、むしろその使命や機能があるが、そこに収集・展示されることがゴールではなからう。本科研の研究を通じ、アイヌ文化は、アイヌの人々自身、それにインスパイアされる人々の「現在の暮らし」をアップデート（更新）してはじめて、真に社会に生かされるはずであるとの見解を提示したい。そのための方策についても、研究の過程で得た事例や知見に基づき意見交換を重ねた。

本科研の成果の検証を目的として、2016年3月21日には、公開ミニ・シンポジウム「いま、あらためて考えるアイヌ・アート 地域・民族・伝統・想いの表象とその未来」を開催した。そこでは連携研究者の五十嵐聡美氏、吉原秀喜氏、オブザーバーの小笠原小夜氏（イラストレーター）、高橋桂氏（マーケティング・プランナー）を含む本科研の参加者六名が、アイヌ・アートの特徴と歴史、制作と展示／販売、ワークショップなどの現況について、異なる立場から討議を重ねつつ調査・考察した成果を報告した。コメンテーターには、二風谷在住の木彫家の貝澤徹氏、国立民族学博物館教授の吉田憲司氏を招いた。貝澤氏は、アイヌの造形の「伝統」をどのように考えるのか、貝澤氏自身の経験に即して、木彫の主題や表現の変化とアイヌ民族としての自意識の生成の関わりについて、その想いを語られた。また世界各地の少数民族の表現と展示の場に精通する吉田氏は、アイヌの人々による造形表現を、民族の「伝統」や「固有性」に還元して享受する文脈が、個人の資質や経験に根ざした個別のアートとして享受する文脈を阻害する可能性について、鋭い指摘がなされた。シンポジウムにおける報告の一部は、池田、山崎が論文にまと

め刊行したが、プロジェクト全体の成果は、コメントや討議の成果を含め共著の本として2016年10月までに編集を終え、17年度中に出版する計画である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 14 件)

池田 忍、アイヌ・アートをひらく「伝統」の継承と創造の回路を探って、千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書『歴史＝表象の現在 記す／編む／現す』（上村清雄編）305集、査読無、2016年、177-189頁

山崎 明子、展示空間のポリティクス アイヌ民族表象をめぐる、千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書『歴史＝表象の現在 記す／編む／現す』（上村清雄編）305集、査読無、2016年、190-202頁

池田 忍、美術に見る戦争と日常 浜田知明の作品に触れて、『千葉史学』67号、査読無、2015年、1-3頁

山崎 明子、野田涼美：テキスタイルを哲学する 現代日本におけるテキスタイル・アート、『美術運動史研究会ニュース』152号、査読無、2015年、12-18頁

山崎 明子、書評 上羽陽子著『インド染織の現場 つくり手たちに学ぶ』、『デザイン理論』（意匠学会誌）66号、査読無、2015年、88-89頁

山崎 明子、酒井雅恵のスモッキングと「ポエム」 現代日本におけるテキスタイルアート、『美術運動史研究会ニュース』148号、査読無、2015年、5-11頁

池田 忍、アイヌ・アートをめぐる「物語」の現在《前篇》 享受者の視点から可能性を考える、千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書『歴史＝表象の現在 記憶／集積／公開』（上村清雄編）294集、査読無、2015年、222-233頁

山崎 明子、言説としての「女職人」、千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書『歴史＝表象の現在 記憶／集積／公開』（上村清雄編）294集、査読無、2015年、212-221頁

山崎 明子、震災の記憶と表象の不可能性 「震災から20年 震災 記憶 美術」展、『美術運動史研究会ニュース』147号、査読無、2015年、1-5頁

山崎 明子、現代日本におけるテキスタイルアート 呉夏枝（OH Haji）の作品をめぐる「記憶」の表象、『美術運動史研究会ニュース』144号、査読無、2014年、1-8頁

池田 忍、アイヌの造形を語る「ことば」 その歴史から未来へ、千葉大学大学院人

文社会科学研究所研究プロジェクト報告書『歴史＝表象の現在』(上村清雄編) 279集、査読無、2014年、191-204頁、http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/BA31027730/2014no.279_191_204.pdf

山崎 明子、「手芸の近代史」からみるアイヌ女性の手仕事、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書『歴史＝表象の現在』(上村清雄編) 279集、査読無、2014年、205-215頁

池田忍・山崎明子、「人口知能」誌の表紙デザイン意見・議論に接して 視覚表象研究の視点から、「人口知能」(人工知能学会) 29-2号、査読無、2014年、167-171頁

山崎 明子、「針々と、たんたん」と今、手仕事と向き合うアーティストのまなざし、『AC2』(青森公立大学国際芸術センター) 15号、査読無、2014年、26-27頁

〔学会発表〕(計 7 件)

池田 忍、アイヌ・アートをひらく「伝統」の継承と創造の回路をさぐって、ミニ・シンポジウム「いま、あらためて考えるアイヌ・アート 地域・民族・伝統・想いの表象とその未来」2016年3月21日、アイヌ文化交流センター(東京都・中央区)

山崎 明子、展示空間のポリティクス、ミニ・シンポジウム「いま、あらためて考えるアイヌ・アート 地域・民族・伝統・想いの表象とその未来」2016年3月21日、アイヌ文化交流センター(東京都・中央区)

山崎明子、手仕事とジェンダー～女性の創造活動をめぐる社会背景～、関西圏女子大学連携プロジェクト「異分野キックオフ交流会」2016年2月6日、武庫川女子大学(兵庫県・西宮市)

山崎明子、周縁化のポリティクスを考える、「すごいぞ、これは！」展(高知会場)スペシャル・トークイベント「それらを愛でること・批評すること 美術のまなざしは「障がいのある人のアート」になにができるのか？」2016年1月11日、薫工ミュージアム(高知県・高知市)

山崎 明子、Issues Surrounding Women's Handicrafts, Sharing Gender Issues in Asia(シンポジウム) 2014年9月26日、奈良女子大学(奈良県・奈良市)

山崎 明子、近代日本の手芸 下田歌子の社会構想と手芸、実践被服会 講演会(招待講演) 2013年4月20日、実践女子大学実践桜会会館1階ホール(東京都・渋谷区)

山崎 明子、宮脇綾子と日本近代手芸史、一宮市三岸節子記念美術館「特別展アプリケにつづる愛 宮脇綾子展」関連企画 講演会(招待講演) 2013年7月14日、一宮市三岸節子記念美術館(愛知県・一宮市)

〔図書〕(計 3 件)

山崎 明子他(共著)、大月書店、久留島典子・長野ひろ子・長志珠絵編『歴史を讀

み替える ジェンダーから見た日本史』(担当箇所「メディアとジェンダー」18-19頁) 2015年、278頁

山崎 明子他(共著)、思文閣出版、武田佐知子編『交錯する知 衣装・信仰・女性』(担当箇所「土地の表象を纏う 「ご当地キティ」をめぐるジェンダー表象論」498-518頁) 2014年、671頁

山崎 明子、一宮市三岸節子記念美術館編『宮脇綾子展 アプリケにつづる愛』(担当箇所「宮脇綾子のアプリケ～手芸の歴史から見る」6-12頁) 2013年、112頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 忍 (IKEDA SHINOBU)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：90272286

(2) 研究分担者

山崎 明子 (YAMAZAKI AKIKO)
奈良女子大学・生活環境科学系・准教授
研究者番号：30571070

(3) 連携研究者

中川 裕 (NAKAGAWA HIROSHI)
千葉大学・人文社会科学研究所(系)・教授
研究者番号：50172276

(4) 研究協力者

吉原 秀喜 (YOSHIHARA HIDEKI)
北海道平取町役場・アイヌ施策推進課・学芸員/主幹

五十嵐 聡美 (IGARASHI SATOMI)
北海道立帯広美術館・学芸課長